

新型コロナで話題に…「嗅覚障害」を早期発見・治療すべき7つの理由

2025/03/22 日刊ゲンダイ



「においがしない」——。新型コロナウイルス感染症やその後遺症の症状のひとつとして注目の嗅覚障害。嗅覚は危険察知のための五感（視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚）のひとつで、その機能低下は生活の質を落とし孤独を招き、生きる喜びを奪う。だからこそ早期発見・治療が必要なのだが、多くの人はその認識がない。日本耳鼻咽喉科・頭頸部外科学会専門医で「おぎのクリニック京都駅前」（京都・下京区）院長の荻野枝里子医師に話を聞いた。

「嗅覚障害を早期発見・治療すべき理由は複数あります。①煙やガス漏れ、腐った食べ物などを感知できず命を危険にさらす②食事がおいしく感じられず食欲不振・フレイル・サルコペニアにつながる③嗅覚は感情と密接に結びついているため低下すると孤独感やストレスなど心理的影響を受けやすくなる④においがわからないことで行動範囲が狭まり生活の質の低下を起こしやすい⑤認知能力低下と関連する⑥脳の外傷や脳卒中などの脳の病気と関係するなどです」

嗅覚障害は認知症とも関わりがある。発症の約10年前の軽度認知障害（MCI）の段階から嗅覚機能が低下するといわれている。

一方で嗅覚が過敏な人は注意欠陥多動性障害（ADHD）とアスペルガー症（ASD）にも関係するといわれている。

「ヒトはにおいを3段階で感じます。第1ににおいの分子が鼻粘膜に付着し、嗅細胞でその化学情報を電気信号に変換する段階。第2に嗅神経と嗅球を介して直接大脳辺縁系ににおいの電気信号を送る段階。最後に大脳辺縁系にある嗅覚野でにおいを認識する段階です」

大脳辺縁系は記憶をつかさどる「海馬」や感情をつかさどる「扁桃体」が含まれる。そのためにおいは記憶や感情と結びつきやすい。特定の香りを嗅ぐと、過去の出来事やその時の感情が鮮明によみがえるのはそのためだ。

嗅覚は加齢により機能低下するが、自覚する人は少ない。

「嗅神経は成熟後も再生を繰り返す特異な神経細胞ですが、加齢によりその再生能力が低下し、嗅覚も徐々に衰えます。視覚や聴覚ほど生活に直接支障を生じないため気づきにくいのです」

しかも、医師であっても「嗅神経は再生する特異な神経」であることを知らず、「嗅覚障害は治らないので見つけない」ケースがあるという。

「嗅覚障害は、鼻の空気の通ら道の異常によりにおいが嗅細胞まで届かない『気導性嗅覚障害』、においの化学物質を電気信号に変換する神経の異常による『嗅神経性嗅覚障害』、脳がにおいの電気信号を認識できない『中枢性嗅覚障害』に大別できます」

■生きる喜びを取り戻す

気導性の多くは副鼻腔炎によるもので、手術やステロイド投与などの治療がある。嗅神経性は漢方やトレーニング、リハビリにより回復するケースもあり、意識的に「においを

嗅ぐ」行為により神経再生が促されたとの動物実験報告がある。中枢性は原因となる脳の疾患の治療を行い、嗅神経性と同様のリハビリなども行う。

「しかし、こうした治療の実態を知らずに発見が遅れ、治療のタイミングを逸してしまうことが多い。残念なことです」

最近ドイツの研究者の4種類のにおいを使った嗅覚トレーニングが着実に成果を上げ、日本では「嗅覚刺激療法」として多施設共同研究が進んでいるという。

病院で行う嗅覚検査には、「T&T オルファクトメーター」と呼ばれる嗅覚検査キットがある。5種類のにおいを嗅ぎ、においを感じた時の濃度や何のにおいかを感じた時の濃度などを調べる。労災認定や基準嗅覚検査として使われている。

「病院では鼻腔内視鏡検査や副鼻腔 CT による慢性副鼻腔炎の検査、アレルギー性鼻炎の検査、頭部 MRI 検査などを行う場合があります」

ほかに新型コロナの早期診断に役立つ簡易嗅覚確認キットや嗅覚トレーニングキットが市販されている。

「治療で何年ぶりかでおいを感じ、思い出がよみがえった」と喜ぶ患者もいるという。あなたもやってみる？